

氏名 原 修 一

学位の種類 医学博士

学位授与番号 乙 第 249 号

学位授与の日付 昭和42年12月31日

学位授与の要件 博士の学位論文提出者
(学位規則第5条第2項該当)

学位論文題目 **Cellular Antibody in Mice Bearing Ehrlich Cancer**
(エールリッヒ担癌マウスの細胞性抗体に関する研究)
第1報 **A. Quantitative Study on Antitumor Activity of Cellular Antibody in vitro** (in vitro に於ける細胞性抗体の抗腫瘍能の量的研究について)
第2報 **Properties of Lymphoid Cells from Sensitized Animal** (感作動物のリンパ球様細胞の性状について)
第3報 **Relationship of Cellular Antibody to Serum Antibody** (細胞性抗体と血清抗体との関係について)

論文審査委員 教授 田中早苗 教授 砂田輝武 教授 佐藤二郎

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

従来の抗腫瘍性の研究は、動物を腫瘍組織で強力に感作し、抗腫瘍移植性を具備するに至ったこれら動物の血清あるいはリンパ組織などに抗腫瘍性の有無を求めたものであるが、本論文では、早晚腫瘍死する運命にある無処置担癌マウスのリンパ球様細胞にも、ある時期には、抗腫瘍性があるということのみいだしたものであって、抗腫瘍性の機作についても多少追求している。

Ehrlich 癌を背部皮下に移植したマウスの局所リンパ節、脾より感作リンパ球様細胞を採り出し、癌細胞と混合培養して、その抗腫瘍性を in vitro で検討した。移植後2週目のリンパ球様細胞に抗腫瘍性が最も高く、末期の4週目のものになると抗腫瘍性が消失する(第1報)。リンパ球様細胞が癌細胞に群集、接着して抗腫瘍性に作用するがごとくであるが、リンパ球様細胞と癌細胞との直接の接触を断って培養しても、リンパ球様細胞の多い場合には、ある程度の抗腫瘍性がみられる(第2報)。リンパ球様細胞に担癌マウス血清を加えると、その抗腫瘍性は増強する。癌移植後2週目のリンパ球様細胞と癌細胞を混合して、マウスに移植する中和実験でも、腫瘍の発育が対照に比し著明に遅延する(第3報)。

(第1報 Acta Med. Okayama 19 (2) : 91-98, (1965))

(第2報 Acta Med. Okayama 19 (2) : 99-106, (1965))

(第3報 Acta Med. Okayama 19 (6) : 279-286, (1965))

論文審査の結果の要旨

本研究は生体の有する抗腫瘍作用の程度を組織培養法を用いて経時的に追求し、あわせてその作用機序についても研究し、Cytophilic な抗体を量的関係にて示したものであり、従来こうした抗腫瘍作用の量的関係に関する研究は極めて乏しく、こうした方面における重要な知見を得たものとして価値ある業績である。

よって本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。